

糸賀一雄の福祉思想における宗教性—実践のなかで鍛えられる宗教哲学—

安藤 泰至（鳥取大学）

「社会福祉の父」とも称される糸賀一雄（1914～1968）は、戦後日本を代表する社会事業家・福祉思想家であり、知的障害児を中心とする近江学園、重症心身障害児のためのびわこ学園を創設するなどの独創的な福祉事業を手がけるとともに、一般読者に向けて書かれた『福祉の思想』（NHKブックス）によっても広く知られている。糸賀は旧制高校時代に友人の影響でキリスト教に入信し、その後京都帝国大学文学部で宗教哲学を専攻、波多野精一教授のもとで卒論「パウロにおける終末論」を書いている。その後、糸賀は代用教員を務めながら、京都学派の教育哲学者・木村素衛に私淑し、彼を「生涯の師」と仰ぐようになる。糸賀の業績について形容する際に、「宗教哲学的理解に基づく教育者としての『先駆性』」（吉田久一）「その比類なき独自性は、何よりも宗教哲学に裏打ちされた高邁な論理性とその思想性にある」（永杉喜輔・野上芳彦）などと「宗教哲学」が引き合いに出されることは多いが、実際に糸賀の福祉思想におけるさまざまな概念や考え方がどのように宗教哲学と関係しているのか、そこに見られる宗教性とは何なのかについて論じたものはほとんどない。

本発表では、「同心円」「発達保障」「内的適応」「この子らを世の光に」などといった糸賀独自の概念が、どのような実践的、社会的課題と文脈のなかで生み出されてきたのかをたどるとともに、そこにどのような意味での「宗教性」や「宗教的なまなざし」が現れているのかを考察する。それによって、単に糸賀自身の活動の原動力として彼のキリスト教信仰や宗教哲学の基盤があったというだけでなく、彼の福祉思想のなかに本質的に宗教的な次元が織り込まれているということを明らかにする。それとともに、とりわけ「青い芝の会」に発する日本の障害者運動（自立生活運動）の「脱施設化」の主張のもとで糸賀の発達保障論や施設志向が誤解されてきたことや、糸賀自身の戦中戦後期における優生思想との関係にも触れることで、糸賀の福祉思想がもつ現代的な意義と射程についても検討したい。